

平成19年度「専修学校教育重点支援プラン」成果報告書

事業名	最上の山岳登山観光に向けた地域人材の育成と山岳登山ガイドの支援事業		
法人名	学校法人最上広域コア学園		
学校名	新庄コンピュータ専門学校		
代表者	理事長 児玉 隆次	担当者 連絡先	事務長 結城 和則 TEL 0233-29-2121

1. 事業の概要

本事業は、地元の関係自治体と連携して、最上地域の山岳の中核をなす神室連峰の登山ガイド(神室連峰登山ガイド)を養成するための教育プログラムの開発・実施を行うとともに、神室連峰登山ガイドの支援事業として、①神室連峰および神室連峰登山ガイドに関する情報発信を目的とするホームページの開設、②神室連峰に関する口承伝説集の編集、③神室連峰登山ガイドマップの作成、④神室連峰登山ガイドの実践活動に助言を与えるサポート組織(仮称「最上自然観光ガイド・サポート・センター」)の設立を行う。

(1) 教育プログラム開発の内容について

a. 神室連峰登山ガイド養成プログラムの開発

端的に言えば、神室連峰登山に特化した高度な登山技術と知識を合わせ持ち、単独で登山ツアーの企画・提案・募集ができる山岳ガイドの養成を目的とする。したがって、本養成プログラムの内容としては、(a)座学研修のカリキュラムには、神室連峰の特徴と魅力、神室連峰の生態系、神室連峰の歴史・文化・伝説、自然環境保護関連の法律および条例、神室連峰における気象変化、神室連峰の夏山・冬山における危険、熱中症・日射病・脱水症状に関する知識、山岳ツアーの企画と実施、ガイド業務計画書と登山計画書の作成方法、ガイドの法的責任と保険、旅行業および旅館・ホテル業とグリーンツーリズムなどが含まれる。(b)実地研修のカリキュラムには、神室連峰のメイン・コースの実地登山とガイド説明実践のほか、高度な登山技術(ビバーク技術、沢登り・沢下り技術、ザイルワーク、ルートファインディング技術)、緊急救急対応技術(緊急連絡、負傷者の応急処置、搬送下山)などが含まれる。

b. 神室連峰登山ガイド養成プログラムの実証講座

座学講座を15回、実地研修を15回実施する。

(2) 神室連峰登山ガイドの支援事業について

- a. 神室連峰登山ガイドマップの作成
- b. 神室連峰に関する口承伝説集の編集
- c. 神室連峰および神室連峰登山ガイドに関する情報発信を目的とするホームページの開設
- d. 神室連峰登山ガイドの実践活動に助言を与えるサポート組織(仮称「最上自然観光ガイド・サポート・センター」)の設立

2. 事業の評価に関する項目

① 目的・重点事項の達成状況

a. 神室連峰登山ガイド養成プログラムの開発

本養成プログラムの座学講座プログラムについては、神室連峰登山ガイドに特化した神室連峰の地質・地史、動植物の生態系、気象変化、伝承・伝説に関する学習のほか、山岳登山ガイド一般に不可欠なロープワーク、GPSの使用法、応急手当法、夏山と冬山における事故回避法、山岳ツアーの企画・募集・実施の方法、ガイド業務計画書と登山計画書の作成法、ガイドの法律上の責任と保険など基本的知識に関する学習を盛り込むことができた。これほど広範な学習プログラムを作成できたのは、最上地域における植物学、動物学、地質学、環境学、気象学、法律学、郷土史に明るい有識者・専門家の存在、ならびに地元防災センター、消防署などの協力のおかげであると感謝している。ただ、難を言えば、疲労の医学的メカニズム(疲労しにくい歩き方、登山のための体力増強法)、道のない山の歩き方(地図とGPSの実践的利活用の方法)、緊急時における地元救急隊などに対する連絡方法と連絡体制の作り方(通信機の使用法を含む)、自然環境保護関連法律と条例、ガイド契約書の作成方法などの学習も必要であった。目標達成度としては、85点と評価する。

本養成講座プログラムの実地講座プログラムに関しては、座学講座プログラムとほぼ対応した実地プログラムを組むことができたと自負している。すなわち、神室連峰主脈ルート縦走コースをはじめとするメインコース6本、吉沢空蔵カンジキ登山をはじめとする計3本の冬山登山コースなどが、これである。この実地講座プログラムの特色は、単に、登山コースに関する認識を深めるという目的だけでなく、各コース毎に特定の学習目標が設定されていることである。例えば、神室連峰主脈ルート縦走コースにあつては、「テント泊に必要な装備」、神室ダム・有屋口往復コースには「負傷者の救出・搬送」、有屋口・神室山土内口縦走コースには「ルートファインディングとザイルワーク訓練」というように、それぞれの学習目標が設定されている。この点は、実地講座の効率化をはかるという観点から高く評価されると思われる。しかしながら、実地講座の開始時期が9月8日となり、冬の訪れの早い最上地域においては、夏山登山の実地講座が計3回程度しかプログラムに組込むことができなかった。目標到達度としては、90点と評価したい。

b. 神室連峰登山ガイド養成プログラムの実証講座

全般的な所感から言えば、本実証講座は高い資質の講師陣と高水準の受講生にめぐまれ、ほぼ、プログラム通りに実施されたといえるが、次のような問題も見られた。

座学の実証講座中、ガイドの法的責任に関する講習においては、神室連峰登山ガイドの人びとの参考に資するため、登山ガイド契約に関する標準約款的なものが提示されてもよかった。また、山岳ツアーの企画・実施に際してのガイド業務計画書および登山計画書の作成に関する講習においても、神室連峰登山ガイドの実態に即したガイド業務計画書の標準的なフォーマットが受講者に示されるべきであったと考える。

実地の実証講座においては、日程上、何分にも秋期・冬期の講習が中心となり、日没時間が早くなり下山の時間を早めなければならなかった関係上、山中において、講師の説明の時間が大きな比重を占め、各受講者による現場におけるガイド実践の練習時間が、ほとんど取れなかったことが、大きな反省点である。また、本講座が安全・安心を基本に据えた講座を志向し、基本的な登はん技術と救命技術を重視した結果、沢登り、沢下りの実地訓練は行わなかった。また、雪山でのビバーク訓練では、受講者のほとんどが未経験者であるところから、雪穴を掘つての訓練は行ったものの、実際に一夜を過ごすような段階の訓練は見合わせ、基本的な訓練にとどまった。

以上の座学と実地を総合した養成講座全体の目標到達度は85%と評価したい。

c. 神室連峰登山ガイドマップの作成

神室連峰登山ガイド養成事業の支援事業の中で、最も重要性をもつのは、神室連峰登山ガイドマップの作成であり、これは神室連峰登山ツアー客の集めるための最も基本的な事業であるといえる。本養成講座の実施委員会では、何度も審議を重ね、慎重な熟慮の上、次のような基本方針の下に神室連峰登山ガイドマップの作成を行った。すなわち、

ア. 神室連峰登山ガイドマップ(以下「マップ」と略称する)の地図は、国土地理院作成の5万分の1の地形図を利用する。

イ. マップの地図には、真北だけでなく磁北の方角を明記するとともに、地図の余白に緯度・経度を明示する。これはGPSの使用を容易にするためである。

ウ. 地図には、最新の情報(施設名、登山道など)を掲載することとし、建設予定の避難小屋の位置なども明示する。

エ. マップの地図には、登山ルートの重要な地点間の登はんの所要時間(上りと下り)を明示する。

オ. マップの説明部分に、新庄盆地から見た神室連峰全体のイメージ図を掲載する。

カ. マップの説明部分には、計16の主要な登山コースを挙げて、説明(写真付き)を施し、各コースの難易度と登山口の標高を明記する。

キ. マップの説明部分において、神室連峰の動植物について、写真入りで紹介を行う。

ク. マップの説明部分で、神室連峰の四季の魅力を写真入りで紹介する。

ケ. マップの説明部分で、神室連峰登山ツアーに関連する交通の案内と問い合わせ先を明示する。

コ. マップで使用される写真については、菅原富喜委員(山岳)、大類貞夫委員(植物)、笹原孝雄実証講座分科会委員(動物)および今井正氏(イヌワシとクマタカ)に提供していただく。

サ. マップ中の神室連峰登山ルートの各ルートに関連する説明文の執筆は、矢口末吉委員にお願いする。

作成され、刊行された神室連峰登山ガイドマップは、本年2月29日の成果発表会の席上で参加者に披露されたが、早くも、地元自治体や山形県最上総合支庁、新庄観光協会等からも引き合いが来ている。目標到達度としては、100%と評価できる。

d. 神室連峰に関する口承伝説集の編集と発刊

神室連峰登山ガイドマップと並んで、神室連峰登山ガイド養成事業を強力に支える事業が、神室連峰に関する口承伝説集の編集・発刊事業である。この口承伝説集に集録されている口承伝説の数は、実に74話にのぼる。最上地域の人びとは、往古の時代から、神室連峰を「神の籠もる山」として信仰の対象にしてきたが、同時にまた、山に住む動物のみならず、草木、土くれに至るまで山の神の所有物であり、みだりにこれを殺したり、折ったりすることはできないという山の掟を忠実に守ってきた。こうした背景から、自然への畏敬の念から発した多くの口承伝説が最上地域の人びとに語り継がれてきたと言われる。

本口承伝説集「神室連峰一山の信仰と伝承」は、本養成講座の実施委員会委員であり、また山形県文化財保護審議会委員長を務める郷土史家、大友義助委員の執筆によるものである。本書は、単に、神室連峰登山ガイドのガイド業務に資するだけでなく、すべての自然物に畏敬の念をもつ先人の自然観を通じて、自然環境の大切さを世人に知らしめる好個の伝説集としても有意義なものといえよう。

目標到達度としては、100%と評価する。

e. 神室連峰及び神室連峰登山ガイドに関する情報発信を目的とするホームページの開設

本校は、神室連峰および神室連峰登山ガイドに関する情報発信を目的とするホームページを開設した。ホームページの内容は、上記神室連峰登山ガイドマップならびに神室連峰に関する口承伝説集と同様である。目標達成度は100%と評価する。

f. 神室連峰登山ガイドの実践活動に助言を与えるサポート組織(仮称「最上自然観光ガイド・サポート・センター」)の設立

神室連峰登山ガイドとして実践活動を行う者は、いかに多くの経験を積もうと、必ずしも全てのガイド業務に通じているわけではない。一線で働く登山ガイドが新たな問題に直面した段階で適宜に、各分野の専門家(動物学、植物学、法学、医学、気象学、地理学、地質学、登山技術、観光学、情報処理工学など)からのアドバイスをうけることができるようなガイド・サポート組織が必要である。このような構想の下に、神室連峰登山ガイドのサポート組織の設立を提案したところである。

しかしながら、こうしたガイド・サポート組織の制度設計の段階で大きな障壁に逢着し、ついに成案をみるに至らなかった。遺憾ながら、目標到達度としては、0%と評価せざるをえない。

②事業により得られた成果

(1) 神室連峰登山ガイド養成プログラムの開発

神室連峰登山ガイド養成プログラムの開発にあたっては、まず、神室連峰登山ガイド養成基本プログラムを作成した上で、これを参照しながら、神室連峰登山ガイド養成プログラム(座学と実地)の開発を行った。前者が現場の制約を度外視して理想的な神室連峰登山ガイドの養成を目指して開発されたのに対し、後者は、協力可能な講師の数と状況、実施時期と実施場所の制約を顧慮しながら、実際の見地に立って開発されたものである。以下、これらのプログラムについて説明する。

A. 神室連峰登山ガイド養成基本プログラム

訓練内容は、ガイドの役割・使命(3時間以上)、神室連峰の山岳ルートとルート別特徴(3時間以上)、神室連峰の地形と生態系(8時間以上)、神室連峰と隣接地域との関わり(6時間以上)、自然環境保護(5時間以上)、ガイドの法的責任と保険(3時間以上)、安全対策と危機管理(2時間以上)、緊急対応(10時間以上)、その他の野外行動技術(13時間以上)、ガイド技術(12時間以上)、夏山登山技術(30時間以上)、冬山登山技術(30時間以上)の12項目125時間以上で編成されている。

B. 神室連峰登山ガイド養成プログラム

神室連峰登山ガイド養成プログラムは、前述のように、理念的プログラムとしての神室連峰登山ガイド養成基本プログラムを参照して開発されるが、本プログラムは、更に、神室連峰登山ガイド養成座学講座プログラムと神室連峰登山ガイド養成実地講座プログラムに分かれる。

a. 神室連峰登山ガイド養成座学講座プログラム

本座学講座プログラムは、神室連峰登山ガイドに特化した知識・技能を修得させるために、神室連峰の自然と生態系、各登山ルートの特徴、神室連峰と隣接地域にまつわる伝承・歴史・文化の学習に重点を置くとともに、中高年の登山ツアーブームに対応するために安全安心登山を最重視したガイド技術(GPS等による現在地確認方法、天気図の読み方、危機管理等)の学習内容を盛り込んでいる。

なお、座学講座は、計15回行われ、1回につき3時間の授業となっている。

b. 神室連峰登山ガイド養成実地講座プログラム

神室連峰登山ガイド養成実地講座プログラムは、神室連峰主脈ルート縦走コースをはじめとするメインコース6本、吉沢空蔵カンジキ登山をはじめとする計3本の冬山登山コースなどをカバーする。前述のように、この実地講座プログラムの特色は、単に、登山コースに関する認識を深めるという目的だけでなく、各コース毎に特定の学習目標が設定されている点である。

(2) 神室連峰登山ガイドの支援事業

A. 神室連峰登山ガイドマップの作成・発行

従来の神室連峰登山の案内マップは10年ほど前に発行されたもの(「神室連峰」山形県庁発行・発行年不詳)であり、地図上に記載されている一部の登山道や施設名が現状と合致しない難点も見られた。今般、本事業によって発刊された「神室連峰登山ガイドマップ」(3,000部)は、多くの有識者の方がたの協力の下に、工夫をこらして完成したものであるが、当然のことながら、神室連峰登山に関する最新の情報を伝えるガイドマップといえることができる。すでに早くも、山形県庁、地元自治体、観光協会から引合いが来ている。今後、地元の観光業者などからも引合いが来る可能性大である。神室連峰の四季の魅力を伝える写真と情報が満載された本ガイドマップの発信力のすごさを深く感じている。

B. 神室連峰に関する口承伝説集の編集

本事業によって発刊された大友義助著「神室連峰一山の信仰と伝承」(A4版全70頁、100部)は神室連峰とその隣接地域に伝えられる口承伝説集としては、おそらく本邦最初のものである。本書の刊行の主な目的は、神室連峰ガイドのガイド業務に付加価値をつけるために、ガイドの説明の中に神室連峰にまつわる伝承をちりばめて登山ツアーに物語性を持たせることにある。

しかしながら、「最上地域にこれほどの豊かな自然が残されているのは、本地域の先人たちの山の神への信仰、すべての自然に対する畏敬の心の賜物であり、まさにこれを体現しているものが、これらの伝承である。」という大友義助委員の指摘は、今後の自然環境保護のあり方を考える上で大きな一石を投じるものと考えている。また、ガイドの口から語られる神室連峰にまつわる伝承が、多くのツアー客に自然環境保護の大切さについて考えるよすがを提供するとすれば、神室連峰登山に何倍もの豊かさを加えるものと期待される。

幸いなことに本口承伝説集は、本校のホームページ上にも掲載されたので、全国の登山家、ツアー客もこれを読むことができる。こうした口承伝説集に対する全国からの反響を待ちたい。

C. 神室連峰および神室連峰登山ガイドに関する情報発信を目的とするホームページの開設

本校は、本事業によって完成した前記神室連峰登山ガイドマップ及び神室連峰に関する口承伝説集の内容をホームページ上に掲載して、神室連峰の魅力とロマンの全国への発信を開始した。神室連峰登山ツアーへの全国からの誘客の効果を期待したい。

③ 今後の活用

本年度事業において開発した神室連峰登山ガイド養成プログラムについては、昨年度(平成18年度)、本校が文部科学省による委託事業(「最上の巨木観光に向けた地域人材の育成とインフラ整備事業」)において開発した最上の巨木観光ルート案内人養成プログラムとともに、次のような今後の活用法が考えられる。

a. 短期(6ヶ月)の登山ガイド養成講座の開設

主として定年退職者を対象として、夏山登山ガイドコース(4月～9月)と冬山登山ガイドコースを開設することが、最も現実的な活用法として考えられる。この二つのガイドコースのそれぞれは、更に、神室連峰登山ガイド科と最上の巨木観光ルート案内人科に分かれる。全ガイドコース全科を修了するには、計2年が必要である。なお、受講料は受講者の負担とし、また、講習日としては、主として、土・日曜・祭日があてられる。

本年度実績報告書(「最上の山岳登山観光に向けた地域人材の育成と山岳登山ガイドの支援事業」)、平成18年度年度実績報告書(「最上の巨木観光に向けた地域人材の育成とインフラ整備事業」)および平成17年度実績報告書(「専修学校と地元自治体・企業(観光事業)との連携による自然観光ガイド養成プログラムの開発」)の内容は、すぐにでもテキストとして転用可能であるし、18年度、本校が刊行した最上巨木情報マップ「最上の巨木100選」、本年度、本校が刊行した「神室連峰ガイドマップ」ならびに神室連峰に関する口承伝説集「神室連峰一山の信仰と伝承」(大友義助著)も、重要な教材として役立つものと思われる。

また、平成18年度事業において構築された「最上巨木観光ガイド一種および二種認定試験」制度に基づいて、各コース各科修了者を対象に資格認定を行う体制づくりも欠かせない。

b. 観光ガイド養成学科の新設

本校が新たに正式な学科として、定年後の人たちを対象とした学習年限1年(全日制)の観光ガイド養成学科を新設し、そこで、冬山登山ガイドコースと夏山登山ガイドコースの課程の授業を行い、一年間を通して神室連峰登山ガイドならびに最上の巨木観光ルート案内人として活躍できる人材を育成するために、本年度ならび平成18年度の養成プログラムを利用することも考えられる。

ただ、一年間、月曜から金曜まで通学しなければならないとすると、本学科学生の対象としては、本地域内か、本地域に比較的近い場所に居住する者に限られてしまうおそれがある。本学科を設立した場合、集中講座的なものを入れながら、十分な休日をつくるという配慮が必要となるだろう。

④次年度以降における課題・展開

一線で活躍する登山ガイドが新たな問題に直面したときに、各分野の専門家からのアドバイスを受けられるようガイド・サポート組織(仮称「最上自然観光ガイド・サポート・センター」)の確立を目指したが、こうしたガイド・サポート組織の制度設計が困難を極め、今年度中についに成案をみるに至らなかった。その事情・理由について述べれば、次の通りである。

第一に、ガイド・サポート組織は、全ての神室連峰登山ガイドのために存立すべき、いわば、公共的色彩をもつ組織でなければならない。加えて、第二に、ガイド・サポート組織が各種専門家に対する報酬支払いのための原資ないしは事業費が必要である。このようなガイド・サポート組織をガイドないしはガイドグループとは別個の独立した団体として設立することが望ましいが、自治体からの補助金を受けない限り、独立の組織体としてのガイド・サポート組織をつくることは困難である。

実際的な方策としては、各ガイドを組合員ないしは会員とするガイド組合もしくはNPO法人を設立し、受益者たる各ガイドから組合費ないしは会費を徴収し、これを原資として、ガイド・サポート業務(ガイド組合もしくはNPO法人の業務の一部として)を行うことである。しかしながら、最上地域に山岳ガイドを専業とする者は、1名ないし2名しか存在せず、何らかの形で山岳ガイド的活動を行っている者の総数は、わずか20名程度しかない。本地域における典型的な山岳ガイドとは、ガイドを余技とする年金生活者ということができよう。このような状況下で、年間一万円程度の組合費ないしは会費を各ガイドに負担させること自体が難しい。また、たとえ、そうした負担をさせることに成功したとしても、集められる組合費ないしは会費の総額が20万円程度では、組織に十分な活動を期待することができない。

思うに、今般、我々が実態調査を行った長野県白馬村山案内人組合が成功しているのは、同村の山案内人が160人前後で、そのうち10人以上がガイドを専業としているという事情と同組合の組合長の優れた指導力に負うところが大きいことを忘れてはならない。これに反して、最上地域の山岳ガイドは、数そのものが少なく、しかも、種々の山岳登山組織(最上エコポリス自然案内協会、最上峡案内人協会等)に分属しており、いまだ一本の組織にまとまっていない。

要するに、本地域において、山岳ガイドの数が増加し、かつ、本地域の山岳登山ガイド全体を包摂するガイド自身の統一的組織の設立がなると、はじめてガイド・サポート体制(組織)をつくることが可能なのである。この点こそ、今後の最重要の課題といえる。

とは言え、今年度、ガイド・サポート組織の確立は成らなかったものの、3年間にわたるガイド養成事業の中で、講座の指導者(講師)と受講者たちの間に、人的なネットワークと呼びうるような信頼関係が生まれてきており、当分の間は、こうした人的ネットワークが、ガイド・サポート組織に代わるものとして実質的に機能することになるであろう。

第二の課題としては、今年度の講師陣より指摘を受けたものがある。すなわち、いまだ手つかずとなっている観光資源たる新庄盆地の北西部から南西部にかけての山岳地帯の登山ルートの開発である。甑山、加無山、丁岳(真室川側から)、与蔵峠、今熊山、念仏ヶ原、板敷山、浄の滝、葉山などの山岳がこれである。これらの山岳は、本地域(真室川町、戸沢村、大蔵村など)の観光資源としての潜在力を秘めてはいるものの、全国的にはあまり知られていない。現在、こうした山岳を全国に発信しようとする気運が徐々に醸成されつつある。

第三の課題としては、何といても養成後のガイドの活躍の場をつくることである。本校による三年にわたるガイド養成の全講座を学習した最上町在住の4名の受講生を中心メンバーとする「最上町東法田山愛好会」は、今年も最上町観光協会と連携して、七つの神室連峰縦走コース登山(初級コース、日程:平成20年5月～10月)と計8回の神室連峰トレッキング(日程:平成20年3月～10月)のツアー客募集を開始した。同愛好会の募集方法も、昨年より比べ、数段とアイデアにあふれるものとなっている。例えば、「早春の亀割山―義経弁慶が歩いた路」など、登山コースのネーミングにも工夫がこらされている。加えて、同愛好会は、本養成講座の講師の一人を会の顧問としており、安全安心登山の態勢づくりにも留意されている。

本地域のような過疎地域においては、地域の牽引者は何といても自治体であり、現段階では、自治体の観光課等との連携がもっとも現実的な方向のようである。そうした中で、地元や仙台・東京等の旅行業者とのタイアップの道筋が拓かれていけば、理想的な形となるであろう。また、本年度の養成講座を修了した23名の受講者の中に、6名の女性が存在する。こうした女性の方がたが、女性ツアー客を対象とした登山ガイドを志すという発展も期待される。

3. 事業の実施に関する項目

①実態調査

(1) 訪問の目的

①山岳観光の先進地を訪問し、最上の山岳登山観光に向けた地域人材の育成とインフラ整備事業に役立てる。

②同時に訪問先の山岳観光状況を実地調査し、当最上地域の山岳観光開発につながる資料の整備を図る。

(2) 訪問先

①長野県白馬村山案内人組合
(長野県北安曇郡白馬村大字北城11002)

②奈良県天川村役場地域政策課
(奈良県吉野郡天川村大字沢谷60)

③西吾妻山案内人クラブ
(山形県米沢市白布温泉天元台)

(3) 調査方法

ヒアリングによる

(4) 調査項目

- ・山岳ガイド養成に関する実施事項
- ・山岳ガイドの人数と一人当たりの年間実施回数
- ・山岳ガイドの加入保険について
- ・山岳ガイドを行なう上での留意点
- ・山岳ガイドの危急時対応について

(5) 調査結果及び分析の内容

①山岳ガイドの仕事は、経験を積み、全体を把握する能力を培ってから、先輩の客を分けてもらう。一種の暖簾分けであり、職人と同じである。

②山岳ガイドは、安全面に注意する旨の説明と監視を行い、利用者に単独行動をさせないようにすることが大切である。

③一般登山客が増加しており、その中でもモラルの低い者達が環境に負荷をあたえる登山が多くなってきているので、自然保護の重要性を山岳ガイドは肝に銘ずべきである。

④山岳ガイドの仕事のおよそ8割は、利用者を安全に案内して、無事に帰ってくるという事にある。後は地域の物語を語ること。そして利用者の監視を行い、環境に負荷をあたえない登山をさせることだといえる。

②カリキュラムの開発

「神室連峰登山ガイド養成プログラム」は、神室連峰の登山ガイドが必要とする知識・技術の習得と神室連峰の観光資源を理解し、神室連峰を訪れる人々に登山ガイドができる人材を育成することを目的とする。

概要は、以下のとおりである。

- | | |
|--------------------|----------|
| ①ガイドの役割・使命 | (3時間以上) |
| ②神室連峰の山岳ルートとルート別特徴 | (3時間以上) |
| ③神室連峰の地形と生態系 | (8時間以上) |
| ④神室連峰と隣接地域との関わり | (6時間以上) |
| ⑤自然環境保護 | (5時間以上) |
| ⑥ガイドの法的責任と保険 | (3時間以上) |
| ⑦安全対策と危機管理 | (2時間以上) |
| ⑧緊急対応 | (10時間以上) |
| ⑨その他の野外行動技術 | (13時間以上) |
| ⑩ガイド技術 | (12時間以上) |
| ⑪夏山登山技術 | (30時間以上) |
| ⑫冬山登山技術 | (30時間以上) |

の12項目で編成され、延べ125時間以上を要する。

③実証講座

「神室連峰登山ガイド養成プログラム」に基づき、実証講座「神室連峰登山ガイド養成講座」を次のとおり実施した。

①期間

平成19年9月4日から平成20年2月17日まで(計30回)

②受講生 23名(男17名、女6名)

- ・平均年齢 51.4歳
- ・年齢別

20～29歳	4名	30～39歳	2名
40～49歳	1名	50～59歳	6名
60歳～	10名		
- ・出身地別

新庄市	8名	金山町	2名	最上町	5名
舟形町	1名	戸沢村	2名	鮭川村	5名

③実施形態

- ・座学15回(火・木) 時間:午後6時～9時
- ・実地15回(土・日) 時間:実地訓練場所による。
早い時で午前6時集合

④成果

- ・本養成講座を通じて、神室連峰における夏山のみならず冬山の魅力も再確認することができた。また、最上地域の山岳観光振興におけるシンボルとしての「神室連峰」が、中高年の登山ブームを背景として、人口減少の一途を辿る最上地域における交流人口増加の起爆剤として大いに期待されており、山岳ガイドを養成することは、本最上地域の観光振興策としても大いに注目を浴びている。
- ・今年、3月、5月、6月、7月、9月、10月において、本養成講座受講生有志(最上町東法田山愛好会)が、地元自治体と連携して、神室連峰を舞台とした山岳トレッキングの会を開催する予定となっており、すでにツアー参加者の募集を実施している。

④成果報告会・特別講演会

(1)登山家「岩崎 元郎」講演会

- ①日 時 平成20年2月20日(水)午後6時30分
- ②場 所 JR新庄駅ゆめりあ内ホール・アベージュ
- ③演 題 「安心安全、楽しい自然との出会いを求めて」
- ④受講者 本養成講座受講生他一般も含めて約100名

(2)特別講演と成果発表会

- ①日 時 平成20年2月29日(金) 13:30～16:20
 - ②場 所 最上ニューメディアセンター研修室
 - ③プログラム
- 第一部 修了証書授与式 13:30～13:50
- (1)修了証書授与
 - (2)特別表彰 校長賞
座学15回皆勤 安達 治彦、沼倉 通、前盛 知見、二戸 拓
実地15回皆勤 岸 栄子
 - (3)校長よりねぎらいの言葉
 - (4)受講生代表あいさつ 大場 政利
- 第二部 特別講演 14:00～15:20
講演テーマ:「聖山ヤラシャンボ峰に挑む」
講師:稲泉真彦氏(県山岳連盟中国チベット登山隊長)
- 第三部 成果発表会 15:30～16:20
- (1)事業概要 15:30～15:50
 - (2)事業内容 15:50～16:10
 - ①「神室連峰ガイドマップ」について
菅原 富喜氏
 - ②「神室連峰一山の信仰と伝承」について
大友 義助氏
 - (3)質疑・総評 16:10～16:20
総評:最上町交流促進課長 五十嵐 信之氏